打聞

七止

830
7
145

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145

ガラス使用

打聞

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145

ガラス使用

後醍醐天皇建武二年ふかく御書
漫々たる海上ふいろくとまりくの潮ひを四方
さうもはるかに二年をへぬ夕ぐれまれ杵築の
浦うそ西風をけしくいかりていさりの
なをとをかさをとをしまをとをふまりせ
ふ秋の月海上をあらうまを明あまを
空うをこそ思ゆるふ海をあ
様をもをこそ今はちうをはをとをとう
ゝをを大阪をいふ秋ふのをあをあをは

大正
7. 5. 16
購求

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

そ弱身なるもまれなる事とおもふ
おもひ知かなれとらあたつまをこと
をよくこそおもひ所少もはなれ人一人又
狩人求めおもてく出あ猶おなをも
あはしてあやしけなのかたに只独うつれ
居たるかの中いとんうなる程なる
とりはたくろひて今はうをはなる
まうふ身のもとへひとうあり巻を
しくもなれのいうなるあわとあやし

そふ忠顕をうそ出迎ひのうを養
特なんとはかるうまあるとうん
ある中こまかの人をもこなをふ
あるけもひ出るうまひこまふ氣未
む孫ふあ母患ていたに学いまも深
なるこをみはあるねとも持あたて
結公らーん地形んうをこ面記
そなるまし

これあやるこもなれある秋の

[illegible]
長年の忠功後代の人[illegible]
[illegible]
せそまろうといふ[illegible]
子孫までも世[illegible]は[illegible]
[illegible]
[illegible]

會席廿五禁之事

一新白之事
一禁白之事
一高新筍之事
一あくひ賊の事
一高吟の事
一遊参孫更於若輩不似合事
一大食大酒之事於老輩不似合歟
一連歌ひさく出して執筆ふとゝろく事

一度愛宕へまゐる事
一爲事有之月毛を好事を粤と海と事
一人の自と別人の時陣屋の人々はやれる
陣ら事我上と必自を
一爲事之命席を急ぐ事
一下事有自上を楽をする時初心にして
付ら事
一人の自出と時音曲なるものやらたおろく
ものとして我自出合ふとそ行れの名ふ

自化をする事
一初つき初ものをもなくなる
出とをして親事をさ重なるとを
外の事
一度愛宕氣を浄をする事
一扇を忘れつる事
一社を事二分不ると事
一用を外を食和泉と出事
一人の自内合を浄を我自をする事

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

一よくも仕合せ歌解きくれる事
一我自ふ人の身あらり身をなる事
一自と世一つ事を事をあわせ付る事
一ものあれば所合自こと事
一我自を事と世とこと事
右之条々世五特ふ大概而已漫連歌席物
長享三暦八月日　宗祇在判

晉王羲之十七帖釋文

十七日先書都司馬未去即日得足下書為慰先書以具示復數字

吾前東粗足作住觀吾為逸民之懷久矣足下何以方復及此似夢中語耶無緣言面為歎書何能悉

瞻近無緣省苦但有悲歎足下大小悉平安也云卿當來居此喜遲不可言想必果言苦

有期耳亦度卿當不居秉此既避又節氣
佳是以欣卿來也此信旨還具示問
龍保等平安也謙之甚遲見卿餳可耳至
為簡障也今往絲布單衣財一端示致意
足下今年政七十耶知體氣常佳此大慶
也想復勤加頤養吾年垂耳順推之人理得
爾以為厚幸但恐前跬轉欲逼耳以爾要欲
一遊自汝領非復常言足下但當保護以俟
此期勿謂虛言得果此緣一段奇事也
省別具足下小大問為慰多分張念足下懸
情武昌諸子亦多遠宦足下兼懷弦數問不
老婦頃疾篤救命恒憂慮餘粗平安知
足下情至
知足下行至吳念違離不可居叔當西耶遲
知問

計與足下別廿六年於今雖時書問不解闊
懷者足下先後二書但增歎慨須積雪凝
寒五十年中所無想須如常奠來夏秋間
或復得足下同身比者悠〻如何可言
吾服食久猶為芳〻大都比之年時為復
可〻足下保愛為上臨書但有惆悵
彼所須此藥草可示當致

来禽　青李　櫻桃　日給滕
子皆裹盛為佳函封多不生
足下所疏云此菓佳可為致子當種之此
種彼胡桃皆生也吾篤喜種菓今在田里
唯以此為事故遠及足下致此子者大惠
也

天鼠膏治耳聾有驗不有驗者乃是
要藥

往在都見諸葛顒曾具問蜀中事云成都城池門屋樓皆是秦時司馬錯所脩令人遠想慨然為爾不信一〻示為欲廣異聞

云譙周有孫高尚不出今為所在其人有以副洪志不令人依〻足下具示嚴君平司馬相如楊子雲皆有後不

知彼清晏歲豐又所出有無一鄉故是名處且山川形勢乃爾何可以不遊目

朱處仁今所在往得其書信遂不取荅今因足下荅其書可令必達

虞安吉者昔與共事常念之今為殿中將軍前過云與足下中表不以年老甚欲與足下為下蜜意其資可得小郡足下可思致之耶所念故遠及

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

省足下別疏具彼土山川諸奇揚雄蜀都左
太沖三都殊爲不備悉彼故爲多奇益令
其遊目意足也可得果當告卿求迎廿人
足耳至時示意遲此期真以日爲歲想足
下鎮彼土未有動理耳要欲及卿在彼登
汶領峨眉而旋實不朽之盛事但言此心
已馳於彼矣

彼鹽井火井皆有不足下目見不爲欲廣異
聞具示

吾有七兒一女皆同生婚娶以畢唯一小者尚
未婚耳過此一婚便得至彼今內外孫十六
人足慰目前足下情至委曲故具示彼鹽井
火井皆有不足下目見不爲欲廣異聞具示

吾有七兒一女皆同生婚娶以畢唯一小者尚
未婚耳過此一婚便得至彼今內外孫十六人
足慰目前足下情至委曲故具示

知有漢時講堂在是漢何帝時立此知畫

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

三皇五帝以来備有畫又精妙甚可觀也
彼有能畫者不欲因摹取當可得不信具告
去夏得足下致卬竹杖皆至此士人多有尊
老者皆即分布令知足下遠惠之至
且夕都邑動靜清和想足下使還具時州
將桓公告慰情企足下數使令也謝無奕外
任數書問無他仁祖日往言尋悲酸如何可
言

諸注並數有闊粗平安惟脩載在遠音問
不數懸情司刑疾篤不果西公私可恨足下所
云皆盡事勢吾無間然諸問想足下別具不
復

胡毋氏注妹平安故在永興居去此七十也吾
在官諸理極差頃比復多〻来示云與其婢
問来信不得也

大唐貞觀十七年歳在癸卯三月一日尚書

僕射上柱
國永興郡開國公臣虞世南翰林學士諫議
大夫河南郡開國侯臣褚遂良等奉
勅摹充館本
兼太子率更令渤海郡開國男臣歐陽詢
奉
勅校定無失

白氏文集題跋

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

弘賢藏本白氏文集題跋 那波氏活字板 續耕齋藏本

卷第九 巻

唯斯房書寫〻金澤文庫本奥書云寛喜三年辛卯二月廿日斯有 同廿三日點了右金五校尉原秦重

同 三十三

會昌四年五月二日夜奉為 日本國僧惠萼上人寫此本且緣公〻夜間睡夢用筆都不堪任且宛草本了

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145　ガラス使用

同四十四

四月廿日爲過海設齋於白樂天禪院一勘了

惠蕚 貞永元年七月廿七日書写了唯森房

同四十九

本云會昌年四月十九日写過神侯男等白金人

院中設齋日僧二百人勘了空無申

同五十二

時會昌四祀夏四月二十九日写了惠蕚

同五十九

菅本云

會昌四年夏五月二日写得勘了惠蕚

鄉人叢近不能再勘之

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145

ガラス使用

林家本題跋

右一卷以無舊點而新加補之

壬子正月二十五日

林學士 田植執筆

右第二卷以無舊點而新加補之

壬子二月七日之夜

林學士 田植執筆

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145

ガラス使用

元和四年戊午初秋那波道喜自洛来
於東武爾新刻白氏文集一本
而寄我我公務之暇隨見以来
為句讀起滴露之毫於今日云
時二年又一日也羅浮子林氏子信之
於江湖夕顔巷中鹿射眠亭

羅山集ニ　白氏文集跋
香山文集一本合部七十一冊三十冊道圓寄我之可渡之孫年
元和四年八月八日夜雨照燈記之駿府御書庫預前侍讀林
道春子信

正路蔵本白氏文集題跋　那波氏活字板
巻第九巻　時習齋蔵本

右金澤文庫點本跋云唯寂房書寫之寛喜三
年辛卯二月廿日寂有　同廿三日點了　右金吾校尉原
秦重

同十一

古本云大唐吳郡苏州南禪院日本國畢頭僧惠蕚自寫
文集時會昌四年三月十四日日本承和十年也寒食
三月八日断火居士惠蕚九日遊吳王劔池武岳東寺

到天竺道生法師昔講涅槃經時五百阿羅漢化
出現聽經座石上分明今在生公影堂裏影側題詩
或本無此詩　元稹
我有三寶一日僧偉哉生公道業弘金聲玉振神
跡遠古窟靈龕天香縹
石龕龍中置影像　此一首詩不是集內數

同十七
完元三年三月十三日書寫之唯舜房書之同日校了
右衛門尉康重奉重

嘉禎二年三月十四日以唐本斯比校了
傳點本之故條加朱點付冥付頭有恐有僻但遺
疑之所思而圖之重可見證本
建長四年正月五日傳下貴所之御本重校了

同二十二
點本跋云萬寿三年三月廿六日書寫畢右衛門廿
尉豐原秦重
貞永二年五月五日朱點了嘉禎二年三月十七日以
唐本比校之但當本之文字所々摺乱銷幽也字體

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

髣髴之所老眼難見解出凡者石室多相殆者也
建長四年正月十二日傳下貴所之御本移點了
同二十四
點本跋云寛喜三年三月廿六日書寫了唯寂房令
書之嘉禎二年三月廿一日同廿八日兩點了右衛門權
廿尉奉寫以庫本比校了建長四年正月廿四日
傳下貴所之御本重校點了
同三十三
寫本跋云會昌四年五月二日夜奉寫日本國僧惠萼（寫作写）
工人寫此本且緣怠怠夜間腦（腦作眼）夢用筆都不堪任
且乳草木了皆疏書之内題之
寛喜三年四月十八日唯寂房正書寫了貞永二年正月
五日校合了同十七日朱了同二月廿八日委點畢右金吾
校尉原奉重
嘉禎二年三月廿日此校庫本詑建長四年正月十五日
傳下貴所之御本重移點了
同四十四
寫本跋云四月昔為過海設齊於白樂天禪院一勘了

惠夢

貞永元年七月廿七日書寫了唯寿房書寫了貞
永元年八月八日自校朱了右金吾校尉嘉禎二年
四月四日比校于唐本嘉禎三年十月十七日申請諫議
桑門之御本校點了凡賞本并御本與先度比校
摺本毎所相違若自摺本之改相叮御本之時既
點於摺本了建長四年二月七日傳下貴所之御
本重移點畢

同四十九

家本有馬會昌四年四月十九日寫過神俊男等
白舍人院中設齋日僧二百人之勘耳空無申

同五十二

時會昌四祀夏月二十九日寫畢惠夢

温故堂蔵書永仁本管見抄白氏文集巻第六十五奥書云
永仁三年六月十七日未刻於開東田中坊馳筆了於此日十
巻皆終篇功者也墨黙者無本仍不加之也以他本更可寫
之耳
同七十一巻跋云
管見抄円融文集慶者自康元之初年初冬中旬四日至
正元之初暮初冬上旬七日都度三年其功既畢或公務之
隙日想而志疲或病患之中心遊而忘甚遂抄七十巻分為
一十巻古今之間緇素之類抄出此集雖多其人皆為
春花而抄出之為秋實而不抄之於今抄者指歸異之
先抽治政之要是依可補松務也次採奇物之詞是依可

養已志也後拾風月之章是亦可悅我目也每披見此集
以可助身上病每握翫此集以可休世上愁倚哉此抄其
德惟多作此抄一部十卷詣清直講終朱墨點彼真人
累代高賢之儒流也當世絶倫之名士也世之所知也人之
所許也然則比学問殊爲亟中寶莫出圖外而已
一換〻〻 永仁三 五 廿六 於関東田中坊書之

市河少庵手筆

白楽天〻〻〻

[illegible] 彌[illegible]
[illegible] 書記[illegible]
[illegible]
我邦に[illegible]の文集は七千卷を止まる[illegible]
[illegible]千万
大業の[illegible]文集七千一卷[illegible]
[illegible]七千一卷の首めの白
氏の官銜姓名を[illegible]第七千卷の間とおなじ
[illegible]人の[illegible]

菅家後集の首めの題詩帝[illegible]の題詩
を載せ[illegible]所愛白氏文集七千卷
[illegible]江吏部集[illegible]白氏文集七千卷
[illegible]古代通行の本[illegible]七千卷
と決定[illegible]
名の尚留[illegible]白氏[illegible]通甲の七卷[illegible]
[illegible]七卷[illegible]
[illegible]七千一の卷[illegible]
菅相公の序文[illegible]

大唐會昌五年刑部尚書白樂天於履道坊
閑宅招盧胡六叟宴集名為七叟尚齒會唐家
愛憐此會希有圖寫障子不離座右有人傳
送呈我聖朝爰南相公感歎顧告云吾黨五六
人年齒雖甚邁頗覽吟詩未難酬樂尚齒高
會何必盧白請集山宅續彼舊蹤
とゝ[illegible]南相公の盛[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

慎の序文まことに我邦の天長元年に当りて文集未成書の所に拙府に到りしものに富千翁に見せ二の

閑閣唯聞朝暮鼓登楼遥望往来船

明天子の恩遇に何の感慨に何ぞ堪へんや遥の字にて和歌の空の字に改めて空慨の字に改めて和歌の空の字の任とせりかくの如く人の口を借りて和歌の字を我邦の詩作に移すべきなり

拙府の長橋まことに三の文集全部七十巻我邦に行はれて恵萼上人に

初めて我しるべ勇義を以て当時白氏の言葉に宮廷なひとして富嘉勝海の法師まして

我邦に拙府の恵萼より己れ為てこれを

拙律とせり声調を正しくせんと白氏を以て風調と学べし者比叡山の法師行基上

おもてる絶句集よりの也る弘仁十三年鑑真の和尚

那律まことに扶桑集よりの也る天長中大学中郎

[illegible]人流道国を唱和のあり律ふいなる
和歌の能くよく声律正しくなるの朗詠集の載
せ隠岐国へ遠流の事

渡口郵船風定出波頭謫處日晴看
るとい言るよ白氏の風調よりおのれ地獄世界を脱
皆浮沈の物環の事 蓮花を泥中に生ずること
塊ぢ

請君愛菊須看我白在頭邊黄在衣
とふ詩を始めとしてこれ白氏の風調

てん皇の寄風い弟和四年まてん敕免の事い洋の
るるこれ行し惠蓮帰朝のこ和とあるまて又恒
良春道が皆を強りんを七月六日額の徳行今く白氏
の風調まて殺よ野副使と記しこれ遣唐副使
うりの強言とおるこれ見あも惠蓮の弟子の
らんとおもらる野皆信長の二公い弘仁年れ
出御るれ承和嘉祥の事まて文名務をい
うそ皆白氏とうる移れるとおるこれ
朗詠集に大内弘仁の時を一人も為り載せ事は

中に二公のことを載せ、

我邦にて白氏と祖

述し、二公と称せられ、中ごろ世に行はれ

たる集五十巻は、文計二千百九十一首と元微之

の序に記して、活板五十巻の編年は二千百八十九

首と元序に云へり、今澤

文庫古本を校讐するに、巻中二百首余、

状一篇補のごとし、回数を付会し、活字

なる只一行やゝ多く、巻末第四十九巻に判道

補入せり、白氏の自道判道上下巻に

当れり、約そ五分より文集中にあるその四十九

十の巻にて百道にあるを、今くはしく

こゝに選ぶ、第一巻ひとしきものあり、後

集二十巻回序に無数と記し、一巻の数、馬元調

本にのせる白氏自作の墓誌の中、文集七十巻

合二千七百二十五首、前集五十巻の編

計二千百九十一首と保さんに、後集の編年千百

九十首、活板後集の編年千百二十首

にて、九十四首の元序のごとく

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

又[illegible]

[illegible]

九月十八日

[illegible]

又云白氏[illegible]文編集の[illegible]初十[illegible]より

[illegible]加[illegible]七十[illegible]より文集と[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

生日

生日之禮古人所無（余昔年流寓蓟門生日有致餽者答書云小年之逐子始說我辰哀邦之放臣乃言初度）顏氏家訓曰江南風俗兒生一朞為制新衣盥浴裝飾男則用弓矢紙筆女則刀尺鍼縷並加飲食之物及珍寶服玩置之兒前觀其發意所取以驗貪廉智愚名之為試兒親表聚集因成宴會自是以後二親若在每至此日常有飲食之事無教之徒雖已孤露（魏晉間人以父亡為孤露愍康與山巨源絕交書少加孤露豬彥深見母自陳幼小孤露旁謂之偏露唐孟浩然送莫氏甥詩平生早偏露）其日皆為供頓暢聲樂不知有所感傷梁孝元年少之時每八月六日載誕之辰嘗設齋講自院修容（元帝所生母）薨後此事

亦絶是此禮於齊梁之間逮唐宋以後自天子至於庶人無不崇飾此日開筵召客賦詩稱壽而於昔人反本樂生之意去之遠矣 日知録

貼黄

章奏之冗濫至萬歷天啟之間而極至一疏而萬數十人累二三千言不止皆枝蔓之辭崇禎帝英年御宇厲精圖治省覽之勤批答之速近朝未有乃數月之後頗亦厭之命内閣為貼黄之式（崇禎元年三月）即令本官自撮疏中大要不過百字黏附牘尾以便省覽此貼黄之所由起也

宋葉夢得石林燕語曰唐制除授有所更改以紙貼之謂之貼黄蓋敕書用黄紙則貼者亦黄紙也今奏狀劄子皆白紙有意所未盡揭其要處以黄紙別書於後乃謂之貼黄蓋失之矣其表章畧舉事目與日月道里於前及封皮者又謂之引黄 同上

千字文

千字文元有二本梁書周興嗣傳曰高祖以三橋舊宅為光宅寺勑興嗣興陸倕製碑及成俱奏高祖用興嗣所製者自是銅表銘栅塘碣壯伐檄次韻王羲之書千字並使興嗣為之蕭子範傳曰子範除大司馬南平王戸曹屬從事中郎使製千字文其辭甚美命記室蔡遠注釋之舊唐

書經籍志千字文一卷蕭子範撰又一卷周興嗣撰是興嗣所次者一千字文而子範所製者又一千字文也陳書沈衆傳是時梁武帝制千字詩衆為之注解是又不獨興嗣子範二人矣乃隋書經籍志云千字文一卷梁給事郎周興嗣撰千字文一卷梁國子祭酒蕭子雲注梁書本傳謂子範作之而蔡遠為之注釋今以為子雲注子雲乃子範之第則異矣宋史李至傳言千字文乃梁武帝得鍾繇書破碑千餘字命周興嗣次韻而成山堂考索同本傳以為王羲之而此又以為鍾繇則又異矣隋書舊唐書志又有演千字文五卷不著何人作隋書文苑舊秦王俊令□蔵為萬字文

淳化帖有漢章帝書百餘字皆周興嗣千字文中語東觀餘論曰此書非章帝然亦前代人作但録書者集成千字中語耳歐陽公疑以為漢時學書者多為此語而後村劉氏遂謂千字文非梁人作誤矣黄魯直跋章草千字文曰章草言可以通章奏耳非章帝書也同上

池魚

東魏杜弼檄梁文曰楚國亡猿禍延林木城門失火殃及池魚後人每用此事清波雜志云不知所出以意推之當是城門失火以池水較之池竭而魚死也廣韻古有池仲魚者城門失火仲魚燒死故諺云城門失火殃及池魚據此

則池魚是人姓名（風俗通已有此說）按淮南子云楚王亡其猿而林木為之殘宋君亡其珠池中魚為之殫故澤失火而林憂則失火與池魚自是兩事後人誤合為一耳

攷池魚事本於呂氏春秋必已篇曰宋桓司馬有寶珠抵罪出亡王使人問珠之所在曰投之池中於是竭池而求之無得魚死焉此言禍福之相及也此後人用池魚事之祖（祖君彥為李密檄文曰燕巢衛幕魚遊宋池）同上

○明月就每五日天晴自處仰之所示雪深之說并可注題示嘉此仰之處引見三代集并後拾遺今集集之孤行雪說無之近代常新說者巨多說由存之處更不見詞苑集當時不持之用又勘是榊本紀氏集遂以無之仍嘗德流百首堀川局說并千載集二首（讀人言書之時參吾御前有仰事）斐女

等猶可引見万葉集以下說有仰其言又質難用說是引物繪之說行雪了為說拾所說求也（中略）又以侍御之雪說猶可求出者仍是下更引見和說

六帖勅撰二首獻之其内

[illegible]

是頃斉校之可用之由被仰六帖又雖撰勅撰歌和

歌不軽之者也何之参内申之又退下

文学庁一日伺候参入道殿御坪近日和歌会歌合

世[illegible]

此歌心艶殊勝但有名人者可謂文学之面稽之

之誠非無心歌也不思議也

○文明年中京都[illegible]

[illegible]

[illegible]

○宗長日記平松の殿と申すは[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○熟田近辺名所

熟田

[illegible]

雲見人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夜寒星

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松風星

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145

ガラス使用

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○ 二之流百家系

杜鵑

[illegible]

或人云拾羽華樂黃鐘調のよの切系四拍子也

[illegible]

○ 狼

[illegible]

[illegible]

神[illegible]

和名抄 稽 唐韵云稽 [illegible] 自生稻也

藤原草云ひつち田又生[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

自生○秋再生稻生稻[illegible]重出也○号私為草

稲粳為晩稲○為[illegible]
[illegible]食稲也と作也此の義[illegible]
○[illegible]
毛利[illegible]
[illegible]毛利重行[illegible]
○[illegible]
[illegible]
○[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

○ 海雲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上包

年號事

長親 清閑 四十七

文政

漢書曰選豪俊講文學稽參政事祈進民心

嘉延

文選曰寤寐嘉猷延佇忠實藝文類聚曰祥風協順降祉自天方隅清謐嘉祥日延與民優游

享壽万年

享正

文選曰至於世祖遂享皇極正位居體重言慎法

仁以厚下儉以足用和而不弛寛而能斷故民詠惟
新四海悅勸矣

文長

史記曰文武茲用長久之術也

延化

五行大義曰壽者孝悌道德備然後修神丹延
壽命富者德化所及豐壤無闕

上包

式部大輔菅原長親

年號事

聰長

東坊城 ㊀十二

政教

史記曰内脩政教外應諸侯

安政

群書治要曰選賢良拳篤敬興孝悌收孤寡
如是則庶人安政然後君子安位矣

洪德

文選曰皇恩溥洪德施

嘉政

唐書曰嘉其美政題贊於聽事

文久

史記曰文武並用長久之術也

文章博士菅原聰長

上包

年號事

為定 菅原 四十五

廷正

群書治要曰朝廷正而後國家正

文政

群書治要曰政平於人者謂之文政矣

寛化

群書治要曰及孝文即位躬脩玄默論議寛恕

厚天下化之有刑厝之風

嘉政

唐書曰嘉其美政題贊於聽事

萬延

後漢書曰豐千億之子孫歷萬載而永延

文章博士菅原為定

洪德

建房 万黒路後 四十六

難

洪德號先輩難有水災恐之由且洪字本朝未聞

之如何位乎

洪

重能 遊田源 二十七

洪德之號洪字雖為新字貞享改元之度高祖又
拳奏洪德之號候洪弘字義相通仍今度所執申也
且古書取洪大之義為称賛之辭漢書称聖王之
大德有湛恩庇洪之語亦以可為佳號歟

二難

實義 正題所三條 二十二

洪德號權中納言源朝臣被陳申旨雖非無其理洪
字為降水之義上以德字義之有共工氏水德舊雖
如權中納言藤原朝臣被難不廢幾號仁候

文長

難

文長號雖每度出現不被用舊難最多且享保度
曩祖申所存之間亦不廢幾候

經豊 廣幡源 四十

陳

文長號舊難多旨被難申之趣雖有是謂必不為不
快就中天明度又故右大臣非臣難申申字儀人殊勝
被採用可然候歟

經久 大炊御門 卷 世九

二難

文長号有字義殊勝之陳答雖非無其理此号京未
有及切之嫌且考共引文史記曰文武並用長久之術也

豊季 烏丸 二十九

獨用之一字不並用恐不文意欲以無拳用為宜

重陳　建房 同上

文長號被難申之旨頗當其理但反音不反俾之趣先賢被議託旦以文武引文獨被用文字嘉號不廿擾准例案之寛政之引文寛極相濟而唯被用寛号後有吉無凶況又祖先淳房植房等申此号旁所度幾復

三難　輝弘 醍醐源 光

文長号万賢難之加之中宮權大夫宰相中將等被難之旨頗當其理既寛政之度家父難申之間旁不度幾可被閣欲尚宜在羣議復

萬延　延光 日野西資 平九

難

万延之号萬壽萬治共序不及殊萬治有回禄之事被採用他号可然欲

陳　豐季

万延之号被難之有其調欲雖然聖代佳号猶或有年序不又有何難以舊号考之永延寛延共多美政何拳万治一箇災且於字義為宜此号可有拳用欲

二難　　實義

万延号陳答之旨既以分明雖然如答議藤原朝臣被難申其例各不快彼加之萬寿有旱疫年之事考之異朝採用赤丗亨難拳申彼

嘉延

難　　經久

嘉延号待号彼雖然嘉字在上号多年序不久彼有如何哉猶可在羣議

陳　　輝弘

嘉延号被申旨趣難協其理按字義嘉者美也孳不拘上下之論有延曆延嘉芳躅且引文殊勝彼最為佳号司被採用歟

重陳　　延光

嘉延之号被陳申旨有其理殊引文旦音響優長彼被採用可然彼歟

二難　　通知

嘉延之号陳答各雖有其理嘉字左傳隱公元年隧而相見注隧若今延道如此不祥之字難被採用彼

三陳　　豊季

嘉延号被難之詞名非無其謂且延字引左傳為不祥之字亦有謂欲雖然爾雅釋詁曰嘉美也揚子方言曰延永長也以之考之美事永久何祥如之寛延改元日曽祖又宣季拳此号為佳号安有採用欲

四陳　　實義

嘉延号被陳申旨實嘗其理且案引文之意最協代如之時義復又漢書有神嘉虞車貳觴福滂洋邁延長之文旁為佳号可被拳姿復

判　　左大臣

嘉延号引文殊勝陳言亦當矣可謂寤寐嘉猷明王之令典延行忠實聖朝之懿範加之嘉祚日延之文數代始之紀元景為徽号欲猶以他号可被議復

嘉政

難　　経久

嘉政号之事家君曰苛政猛於虎音鄉音相似弓利可有如何哉

陳　　通知

嘉政号雖被難申引之最可褒賞且明嘉清曆數久音鄉音通旁珍重号復尚可在上宣復

二難　　延光

嘉政号雖被難申別稟之号被陳申旨雖其謂熟
案禁國（法禁獄訪）（コン國ト祢）黄紙（通横紙訪）（コン紙ト祢）以是等之淮擬政字
雖可被用吳音響有嘉祥嘉祥之兩号之間此号
難申左右宜在羣議

判　左大臣

嘉政之号脚所存後可被移池号後

延化　重能

難

延化之号雖為俗難於兩字連續者不快之旨響（仁相）
通後可被避此号後半歟

陳　経豊

延化之号被難申旨雖有其謂延字在上例遠則延曆
延喜近則延宝延享殊為聖代之佳号且為文字皇化
益延子八紘之弥之意也不拘小嫌被挙用有何子細乎
在羣載議

二難　通知

延化号雖被陳申代未始同字被用之先蹤共以不快
之例後且化字寛政之度父大納言引白虎通之文義
難申後亨以難挙用後　建房

重難

述化号陳答之疑非無其謂雖引文蘭字生合且為新
号可有猶豫歟

文政

難　　輝弘

文政號雖有文化寛政之佳例竊案與文正音韻全
同且如文正在天變之事最不可然於彼拳用者可在
如何彼　沒年

陳　　經豊

文政号被難申旨趣雖似有謂倩案之寛正年間屢
有兵革然而近年被寛政之字甚為美号加之政字

寛政始被採用已為芳躅文字在上文應文亀吉彖流
當時文化最嘉例也且唐堯以文思安安之德致萬邦
時雍之化是文政之謂也被採用可然事

重陳　　重能

文政之号如陳答寛政文化年序共久加之朝禮復古四
海安穩實以古文德政之吉彖可被採用此号可然歟

重陳　　建房

文政号諸卿庶衆疑共恊其理就中如權中納言源朝臣
被申寛政文化之間天下昇平嘉禮屢行實可謂
聖衆又代始被用　舊主年号之字為吉例旨曩

祖宣房中之後旦業後漢書有文明善政之語最為
美号可被登庸後

判　　左大臣

文政号引文名可徴陳頌美就中政平於人者謂之文政
即粥子對周武王之語可謂萬世之格言且為疊字号
珍重以嘉延文政之兩号可参聞後

皇元風雅卷六拔萃

十雪題詠

李州窓

韓王堂雪　太祖出幸

警蹕無聲輦路平　玉龍蜜衛至尊臨　睡鬟
一榻風寒澹坐暖　重茵夜色深門外飛花
天地曉爐邊雲策帝王心玉笙吹徹江南雨
人擁羅衾正醉吟

嚴春山　撫州人

韓王堂雪

帝星夜度紫薇宮滕六先驅擁玉驄立處袍
生風絮白生間殘地爐紅宋數百年天下
普第兩三盃酒中榻外有人方鼾睡
夢回花月小樓東

葉水村 龍泉人

伊川門雪 游楊待立

戶屨天寒侍講帷先生瞑目坐如尸文函
立久已潛悟尺瑞積深渾不知白室虛生
初見頃紅爐點化旦休時一家教法清和異
伯子春風更可師

袁安道

袁安洛雪 高卧洛雪

世界瓊瑤別一般出門半步即風寒飛花
上下山河異卧榻中間天地寬無過客來
行迹少作于人態此時難立身大節當然耳
豈意清高却得官

陳應江

李想淮雪 襲平蔡柵

玉龍戰罷舞殘鱗常侍乘虛夜進兵槽馬
疾騰來殺氣池鵝亂聲雜軍聲文城風急

嚴師律洄曲雲低壓賊營士女迎門笑相語
曉来春滿蔡州城

王劒川

王猷溪雪 訪戴安道

心事微茫剡曲流夜寒風定六花收山川一色
天如畫上下文光月在舟自醉自吟懷渺〻興
来興去永悠〻歸歟怕折堂前竹首問平安
如昨不

李蒙齋

李及郊雪 訪林和靖

漠〻長堤濕絮漫使君来却隱君關天寒
誰信五馬出湖凛惟隨一鶴還林麓清
無群從混梅花冷伴二翁閑池時白集歸
舟月別去先生不汙顏

陳天霽

蘇武羝雪 北海守節

海上艱關十九年孤臣凍死不呼天忍將膝與羊
俱跪誓把心同節共堅衰鬢霜飛甘卧窖剛
腸氷透只餐旃當時不為求匈牧千古
高飛更凛然

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145
ガラス使用

鄭溥

鄭縈驢雪　灞橋吟思

長憶飄然灞水涯此時此景客那知風前策蹇蕭蕭遠橋外衝寒去々遲飛絮一鞭披野服落梅雙鬢染吟髭思清如許寧無句豈恐當年有逸詩

孫平齋

孫康書雪　夜映讀書

倫光不肯學康衡千古先生以介名造物怜人共清句夜隱無月亦光明恍疑藜杖吹煙照誰信銀河剪水成他日烏臺霜凜々依然氣槩老書生

劉南金

歐陽詩雪　禁體題詩

鹽絮紛紛語濫觴如何說馬到驪黃壯方明禁千餘字條令昭垂六乙堂頡士筆弄成東手坡翁戰鐵可爭光來薇只把霏々說剛後多安床上床

830
7
145

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『打聞 7巻』 請求記号 830-145

ガラス使用